



忘れまじ8月6日

ーその時広島には黒い雨が降ったー

**1945年、8月6日8時15分**、広島に原子爆弾が投下され広島には黒い雨が降り

ました。その日のことを絶対に忘れてはならないという意義を込めて、毎年、広島平和式典が行われています。今年は特に3年生が修学旅行で行った地。今日は、橋本先生の呼びかけに集まった3年生を中心に23名とともに式典の様子を視聴。8時15分に黙とうを捧げました。その後の広島市長の「平和宣言」、小学生2名による「平和への誓い」も視聴しました。平和宣言の要約は以下の通りです。

1. 現状への強い危機感

世界の分断:国際法をないがしろにする大国の横暴な振る舞いが、世界の平和と安定を激しく揺るがしている。

核抑止力への依存:多くの為政者が核抑止力に依存し続けており、核兵器のない世界は遠のいている。

対話の決裂:2026年春の核拡散防止条約(NPT)再検討会議で成果文書を採択できなかった現状を憂慮。〔

2. 世界の指導者(為政者)への訴え

被爆地の惨状認識:核の非人道性を無視すれば「第三のヒロシマ・ナガサキ」を招くと警鐘を鳴らし、為政者に対し、広島訪問と核廃絶への政策転換を求めた。

3. 日本政府への要望

条約への参加:核兵器禁止条約の会議にオブザーバー参加し、一日も早い締約国入りを求めた。

そして、何よりも小学生2名による「平和への誓い」に心打たれました。以下に全文を紹介します。

平和への誓い

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、どんな気持ちになるのでしょうか。

私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。

今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。ぼろぼろになった制服。黒く焦げたお弁当箱。

それは、当たり前の毎日を生きていた証です。昭和20年(1945年)8月6日、午前8時15分。

たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。

髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。

「痛いよ。苦しいよ。」「助けて、お母さん。」「死にたくない。」「助けてあげられなくてごめん。」

死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。

目をそらさず、知ろうとすること。悲しい現実でも向き合うこと。そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島のこととして、行動する責任があります。

相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。

平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。

こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。

かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。



令和8年(2026年)8月6日

こども代表

広島市立高須小学校6年 柿崎(かきざき) 由宇(ゆう)

広島市立高南小学校6年 河野(こうの) 和希(かずき)

相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け入れること。まさに「人を認める文化」です。

まだまだ暑い日が続きますが、体調管理をしっかり行い、有意義な夏休みを最後まで！